東奥日報社提供

東　奥　日　報
2022年（令和4年）10月20日（木曜日）（25）

人をつくる 地域と歩む
八戸工業大学半世紀
―中―

感性デザイン教育

柔軟な発想で課題解決

2005年4月、八戸工業大学の二つ目の学部として感性デザイン学部が誕生した。特徴的なのは、地域の企業や自治体などと協働し、デザインの力で地域の魅力発信や課題解決などに取り組む点。学生たちはイラストや写真、3次元コンピューターグラフィックス（3DCG）などさまざまな手法と柔軟な発想で、新しい価値を生み出す「モノ」や「コト」のデザインに関わっている。

「ハチカを買ったよ、と言われるとすごくうれしい」と声を弾ませるのは、2月から八戸圏域で利用が始まった交通系ICカード「ハチカ」をデザインした同学部3年の佐々木南海（みなみ）さん(21)。オリジナルのカタカナ書体と文字の色は視認性が高く、シンプルで明快なデザインが幅広い世代に受け入れられている。

同4年の荒木田琴音さん(22)は、八戸市の蕪島ウミネコ繁殖地の天然記念物指定100周年記念ロゴマークを制作した。蕪島現地調査や関係者の説明からアイデアを膨らませ、100種類近いラフスケッチを描いた。その中から修正と改良を重ねた作品が採用され「フラッグや小物などに自分のデザインが使われているのを見て、とてもうれしく誇らしい気持ちになる」とほほ笑んだ。

このほか同学部生は本年度、八戸製氷冷蔵の創業100周年記念ポスター、アールテック（八戸市）が開発中の電解水生成装置の筐体（きょうたい）のデザイン、イベントの企画・運営などに取り組んでいる。

発表会で電解水生成装置のデザインやネーミングについて説明する感性デザイン学部生＝6月

同学部が目指すのは、デザイナーの思考プロセスをビジネスなどの課題解決のために活用する「デザイン思考」のスキルを持つ人材の育成。感性デザイン学科長の髙屋喜久子教授は「今後は工学、デザイン、文化など多様な分野横断型の総合知により、共感し合いながらデザインをつくる時代」と説明する。本年度からの新カリキュラムでは、「視覚伝達（ビジュアルデザイン）」「表現」「空間と立体」の3領域を複合的に学ぶことが可能となり、より専門性の高いクリエーター人材の育成に力を入れる。

今春までの卒業生は504人を数え、建設、小売り、製造、情報通信などさまざまな業界で活躍している。同学部生の就職内定率は昨年度まで4年連続で100％を達成した。

18年度卒業生で、同市の総合建設業・田名部組総務財務部に勤務する上野黎香さん(26)は「好きなことを好きなだけ学べた4年間だった」と懐かしむ。染色に興味を持ち、卒業研究のテーマは古道具のリノベーション。「デザインを学ぶことで将来の選択肢が広がった。先生や友達との出会いは財産。学生は自分がやりたい道をどんどん突き進んでほしい」（千葉真由美）

※「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」